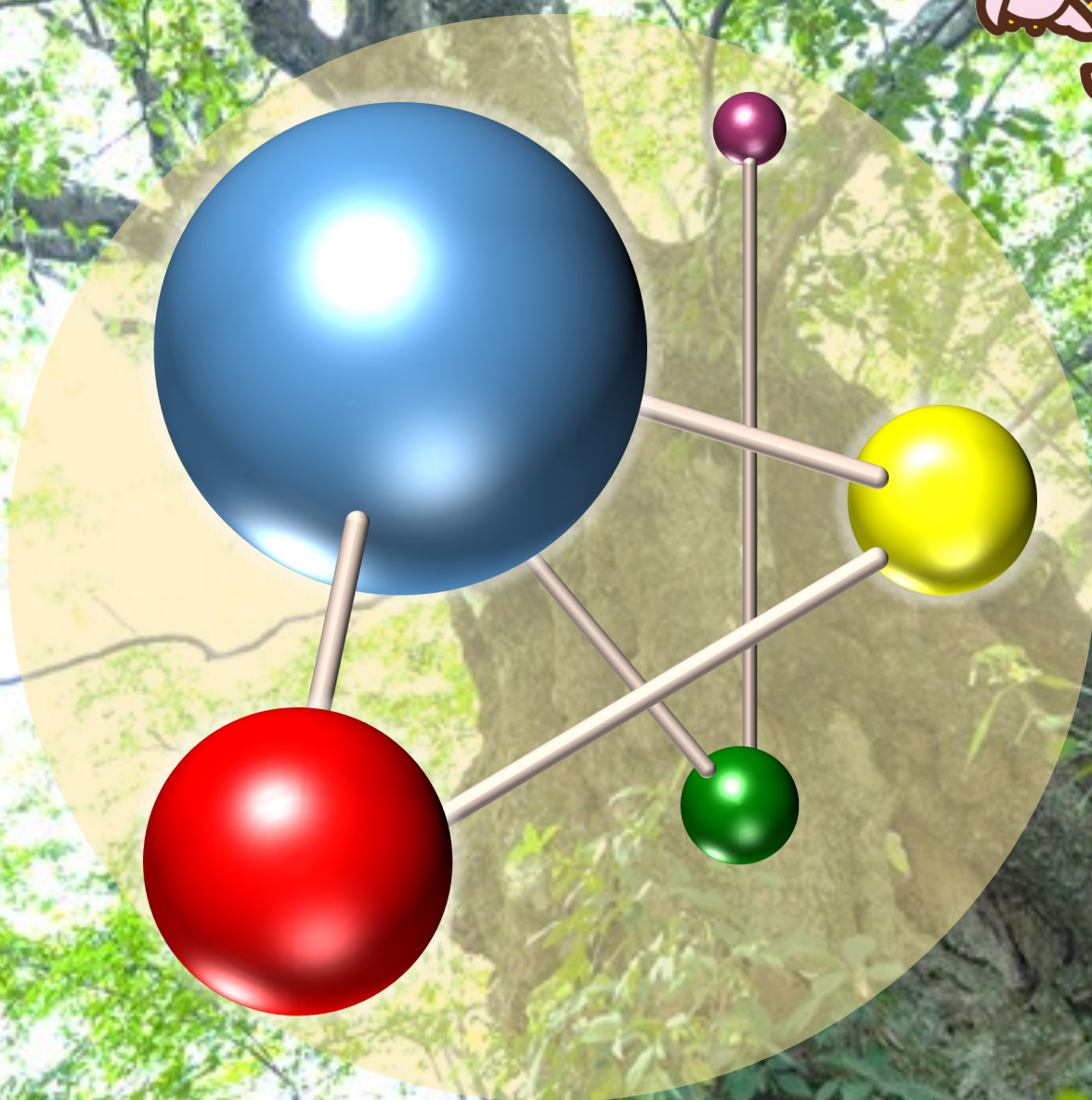


豊かな学びをつなぐ カリキュラム・マネジメント ハンドブック

Curriculum management
Handbook



京都府総合教育センター

全教職員で児童生徒の学びを豊かにつなぐ

～ハンドブックのねらい～

新学習指導要領において様々なキーワードが登場しました。「社会に開かれた教育課程」、「主体的・対話的で深い学び」、「プログラミング教育」など、新しい概念や学びの形が示される中、「カリキュラム・マネジメント」もまた、新学習指導要領のキーワードのひとつとして取り上げられています。「カリキュラム・マネジメント」という言葉自体は新しいものではなく、「総合的な学習の時間」が登場したと同時に現れました。本格的にクローズアップされるようになったのは新学習指導要領からだと言えるでしょう。

日々の授業や学級づくり、環境づくりなど様々な教育活動を、学校教育目標実現のため編成された教育課程に位置付け、教育効果の最大化を図る「カリキュラム・マネジメント」。教職員一人一人がその考えを理解し、日々の実践に取り入れることが重要なのですが、そのためには校内の教職員研修による共通理解を図る必要があります。

本ハンドブックはそうした「カリキュラム・マネジメントの校内研修」を支援するために作成しました。限られた時間の中で効果的に「カリキュラム・マネジメント」について共通理解を図るためのワークシートを中心に編集しています。このワークシートは総合教育センターの出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」で思考ツールとして活用したものに改善を加えたものです。

京都府の教育ならではの「包み込まれているという感覚」のもと、全教職員で児童生徒の豊かな学びを創造するために。学校の教育活動が「カリキュラム・マネジメント」によって、より良いものになることを、そして、本ハンドブックがその一助になることを願っています。



もくじ



- 1 カリキュラム・マネジメントの「3つの問い」 ……3
- 2 4つのステップで取り組む
カリキュラム・マネジメント ……5
- 3 みんなで考えよう「育てたい力」
～実態把握と共有を目標設定につなげる～ ……7
- 4 学びを俯瞰する単元配列表
～「育てたい力」と「学習内容」でつなぐ学び～ ……11
- 5 学びをつなげ、広げる単元構想
～「育てたい力」に向けてつながる学び～ ……13
- 6 学びの効果を高める授業構想
～6つの工夫で学びをマネジメント～ ……17
- 7 成長を見える化する「学級づくりすごろく」
～取組をつないで学びの効果を高める～ ……21
- 8 学びを創造する「9×9シート」
～児童生徒が主体的に学びをマネジメント～ ……23

カリキュラム・マネジメントの「3つの問い」

新しい学習指導要領には様々なキーワードが見られます。「主体的・対話的で深い学び」、「特別の教科 道徳」、「プログラミング教育」…。それらのキーワードのひとつである「カリキュラム・マネジメント」について、「3つの問い」を中心に解説していききたいと思います。



What カリキュラム・マネジメントとは何か？

▶ 学校の教育目標を実現するため、教育課程を編成・実施・評価・改善する営み

新しい学習指導要領で「カリキュラム・マネジメント」が重要なキーワードとして取り上げられてから、様々な場面でこの言葉を目にしますが、ひと言で説明すると「学校の教育目標を実現するため、教育課程を編成・実施・評価・改善する営み」です。

そのためには、児童生徒の姿や地域社会の実情等を踏まえて、学校の教育目標を設定することが何よりも重要であると言えます。スタート地点とゴール地点を明確にすることで、教育課程の内容が充実したものになり、授業づくりや学級づくりなど日々の実践の質が高まります。

また、評価・改善を繰り返すことで、さらに教育課程が充実するという好循環を生み出す営みなのです。

各学校には、学習指導要領等を受け止めつつ、子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づきどのような教育課程を編成し、どのようにそれを実施・評価し改善していくのかという「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められる。

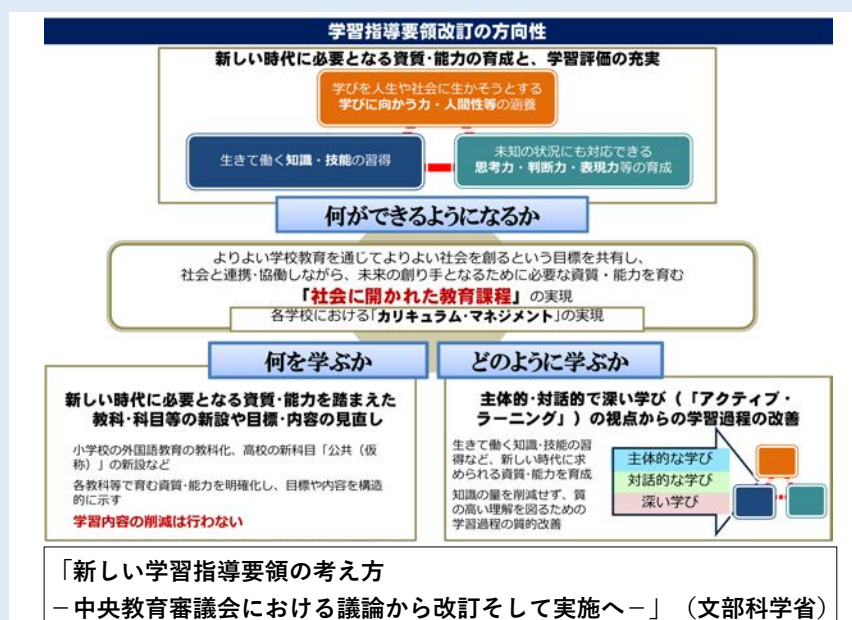
中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程企画特別部会 論点整理

Why なぜカリキュラム・マネジメントが必要なのか？

▶ 予測困難な未来に求められる資質・能力を育むため

この問いに関する答えは様々な文脈で語られますが、ここでは「社会に開かれた教育課程」をキーワードに解説します。

児童生徒がこれから生きる社会はグローバル化、情報化等により変化が激しく予測困難な未来であると言われています。そのような社会に求められる資質・能力を育むためには「社会や世界に向き合い関わり自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力」とは何かを明確化した「社会に開かれた教育課程」の実現が求められます。そのため、教育課程は社会の変動に対応して常に最新のものに更新されていきます。カリキュラム・マネジメントは教育課程を社会の状況に応じて最適化するために必要な営みなのです。



「新しい学習指導要領の考え方
—中央教育審議会における議論から改訂そして実施—」（文部科学省）

Who 誰がカリキュラム・マネジメントに取り組むのか？

▶ 教職員一人一人がそれぞれの立場で関わることが不可欠

マネジメントとは「経営管理」などの意味を含むため、カリキュラム・マネジメントは「管理職の役割」と考えられてしまうことがあります。

確かにグランドデザインや教育課程の作成など、学校全体のカリキュラム・マネジメントの主体は管理職です。しかし、グランドデザインや教育課程を、授業づくりや学級づくりなど、日々の実践につなげるのは教職員一人一人です。つまり教職員一人一人がカリキュラム・マネジメントを理解し、「自分事」として取り組むことが重要なのです。

学校の目指す教育目標の実現に向けて、教職員一人一人が日々の授業等についても教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組むことで、教育効果の最大化を図ることができるのです。

「カリキュラム・マネジメント」については、校長又は園長を中心としつつ、教科等の縦割りや学年を越えて、学校全体で取り組んでいくことができるよう、学校の組織及び運営についても見直しを図る必要がある。そのためには、管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある。また、学習指導要領等を豊かに読み取りながら、各学校の子供たちの姿や地域の実情等と指導内容を照らし合わせ、効果的な年間指導計画等の在り方や、授業時間や週時程の在り方等について、校内研修等を通じて研究を重ねていくことも考えられる。

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程企画特別部会 論点整理

「学校の教育目標を実現するため、教育課程を編成・実施・評価・改善する営み」であるカリキュラム・マネジメント。では、何から、どのように始めればよいのでしょうか？ 4つのステップでカリキュラム・マネジメントの流れを解説します。



Step 1

実態の把握と共有

はじめに取り組むのが「実態の把握と共有」です。教職員全員で「スタート地点を確認」することが、カリキュラム・マネジメントの第一歩と言えます。

Point! SWOT分析～学校内外の強みと課題～

効果的な実態把握の手法として「SWOT分析」があります。学校内外の強みと課題から考え、共有、焦点化することで次の目標設定につなげることができます。

	内部要因	外部要因
プラス要因	強み 【Strength】	支援的に働く場合 【Opportunity】
マイナス要因	弱み 【Weakness】	阻害的に働く場合 【Threat】

Step 2

重点目標の設定

実態把握で学校内外の強みと課題をピックアップできたら、次は最も重要な「重点目標」の設定です。学校教育目標の実現につながる実用的な重点目標の設定が必要です。

Point! SMART～実用的な目標設定～

せっかく設定した重点目標が「絵に描いた餅」では意味がありません。実用的な目標を設定するポイントをまとめた「SMART」の法則を紹介します。

S pecific	具体的・焦点化した
M easurable	測定・検証可能な
A chievable	達成可能な
R elavant	価値観に沿った
T ime-bound	期限が明確な

「SMART」のそれぞれの文字に何を当てはめるかについては多様なバリエーションがあります。ここでは奈良教育大学赤沢早人教授作成の講義資料を参考にしました。

Step 4

実施・評価・改善

編成した教育課程を実施し、定期的に評価・改善していきます。この時、「改革のループ」「改善のループ」の二つを効果的に機能させることを意識しましょう。

Point! 「改革」「改善」二つのループ



学期や年度に取り組む「改革」のループと単位ごとに取り組む「改善」のループを機能させることが重要です。

Step 3

教育課程の編成

重点目標を設定したら、次はそれを実現するための教育課程の編成です。編成の際には「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」を押さえることが大切です。

Point! カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

みんなで考えよう「育てたい力」 ～実態把握と共有を目標設定につなげる～①

様々な場面での実態把握
と共有、目標設定に

ワークのねらい

カリキュラム・マネジメントにおいて最も重要なポイントが「目標設定」です。設定した目標が児童生徒の実態を反映していなかったり、教職員の中で共有できていなかったら、いくらカリキュラムを工夫しても、十分な効果は得られません。

このワークはそうした「目標設定」に全教職員で取り組むことがねらいです。

児童生徒の実態をスムーズに共有し、そこから「育てたい力」を焦点化するためのワークです。本来であれば先に紹介した「SWOT分析」をはじめとする様々な分析方法で実態を明らかにし、共有するとよいのですが、限られた時間で、若手教職員も参加する校内研修においては、ややハードルが高くなってしまいます。

全教職員がそれぞれの視点で児童生徒の実態を共有し、目標設定に参画することでカリキュラム・マネジメントの第一歩を踏み出しましょう。

ワークの流れ・注意点

Step 1 個人でワークシートを記入

ワークシートの項目を個人で記入します。

「児童生徒の強み・課題」について考え、それに基づいて重点目標となる「育てたい力」を検討します。

また、「育てたい力」を育成するために、授業づくり、環境づくりなどで取り組めそうな工夫についてメモします。

一人でシートを完成させる必要はありません。意見を出し合い、「育てたい力」を焦点化するグループ協議を大切にしましょう。

Step 2 グループで共有し、まとめる

個人で記入したワークシートについてグループで共有し、まとめます。

「児童生徒の強み・課題」について共通項を整理し、焦点化します。「育てたい力」についても共有し、「強み・課題」とつながら、3つ以内に整理します。

どのようなグループで構成するかによって効果は大きく変わります。学年や経験年数、教科のバランスを考慮して編成しましょう。

Step 3 全体で共有する

各グループのまとめを交流し、全体で共有します。

発表後に掲示して「見える化」したり、グラウンドデザインの検討に活用するなど、後の実践につなげることが重要です。

せっかくの協議も「やっておしまい」では意味がありません。その後の活用についても全教職員で共有しておきましょう。

ワーク
1

みんなで考えよう「育てたい力」シート

担当している
教科・学級

学校教育目標

担当している児童生徒の強み

担当している児童生徒の課題

育てたい力

こんな工夫ができそう
(メモ)

育てたい力

こんな工夫ができそう
(メモ)

育てたい力

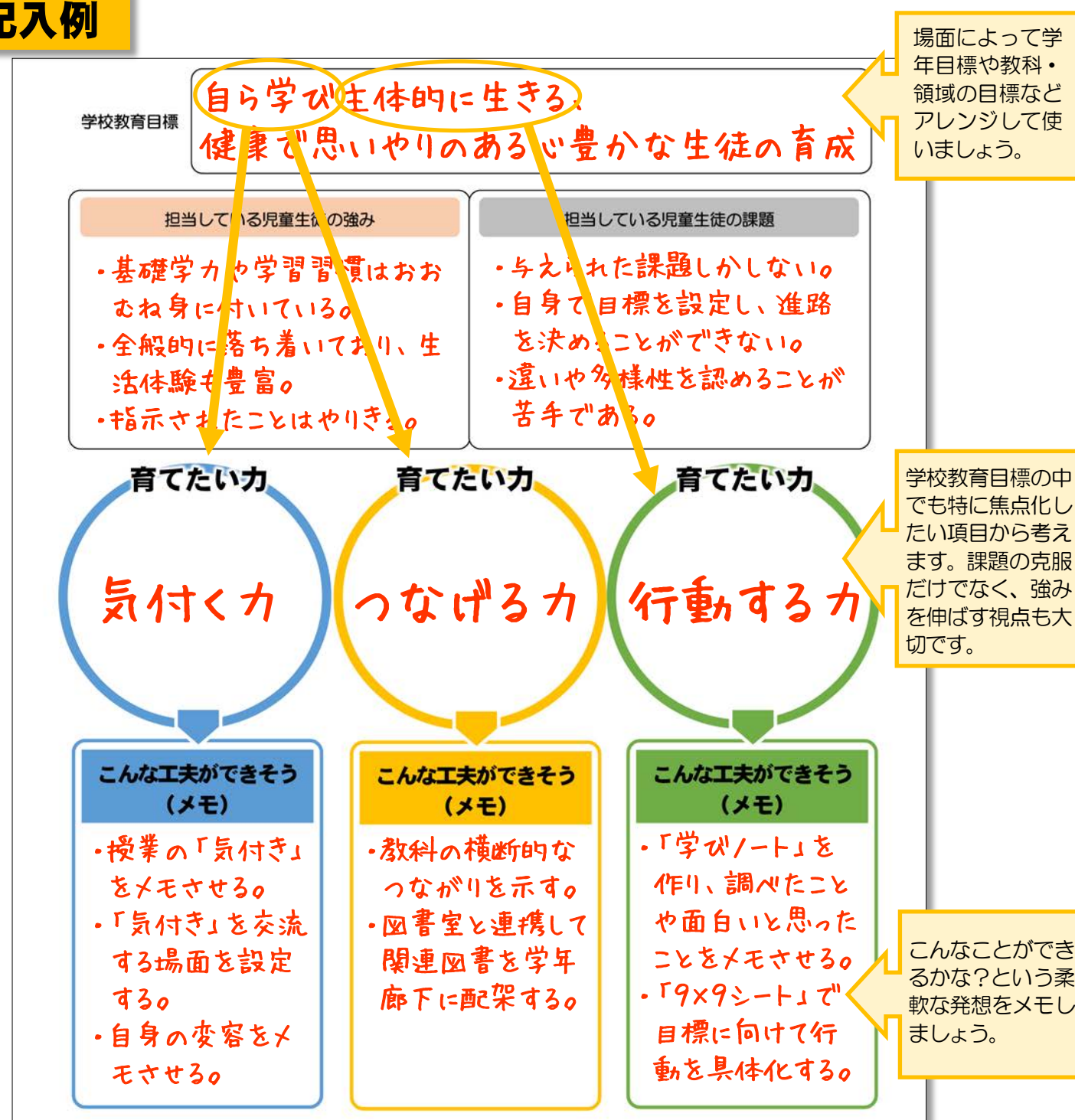
こんな工夫ができそう
(メモ)



※ワークシートデータは京都府総合教育センターホームページ（ITEC）に掲載しています。

みんなで考えよう「育てたい力」 ～実態把握と共有を目標設定につなげる～②

記入例



Point!

「このワークをいつ行うか」は重要なポイントです。学校の実態にもよりますが、3月に1年間のまとめとして行うのが効果的です。3月に教職員の中で実態が共有されることで、次年度の取組に生かしくなります。共有された情報は新たに着任する先生方にとっても有意義なものになります。6月頃に年間計画を見直す際にもこのワークは効果的です。実態に合わせて活用してください。

教えて！センタ君♪



効果的に実態を把握・共有するためには、どうすればいいの？



実態の把握・共有はとても大切！限られた時間の中で効果的に研修を進めるポイントをいくつか紹介します。

1 多角的な評価（教職員、保護者、児童生徒、地域の方…）を活用する。

同じものでも別の立場から見ると違って見えることがあります。教職員だけでなく、保護者や児童生徒、地域の方の声を反映させましょう。日頃からそうした「声」に耳を傾ける意識を持つことが大切です。

2 各種データ（各種アンケート、学力調査、出席状況など）を活用する。

学校には学校評価アンケートや学力調査など多くのデータがあります。そうしたデータを有効活用しましょう。事務職員や養護教諭、司書教諭など、様々な専門のデータを活用することで「チーム学校」による実態把握が可能になります。

3 「見える化」して共有する。

共有する際、重要なのは「見える化」することです。左のワークシートなどの思考ツールやICT機器を活用して効果的に考えを共有しましょう。研修での学びを実践につなげる意識を高めるためにも、職員室に掲示するなどの工夫が効果的です。

4 「強み」も挙げておく。

目標を設定する際、「課題の克服」だけでなく「強みの伸長」という視点が大切になります。そのためにも、児童生徒の「強み」を共有しましょう。「強み」は課題克服のヒントにもなります。

大切なのは「次につながる実態の把握・共有」です。共有した情報をどのように発展させるのかを事前に共通理解した上で取り組むと、より効果的な研修になります。

学びを俯瞰する単元配列表 ～「育てたい力」と「学習内容」でつなぐ学び～

教育課程の全体像の把握と
横断的な学びの共通理解に

ワークのねらい

このワークは「カリキュラム・マネジメント」の研修でよく行われているものです。様々な実践紹介で目にしたことも多いことでしょう。

単元配列表を用いて一年間の学習活動を俯瞰で見渡し、「育てたい力」との対応や「学習内容」のつながりを視覚的に把握することで、カリキュラム・マネジメントの三つの側面の一つである「教科等横断的な学習活動」への意識を、全教職員で共通確認することができます。

また、この表を掲示して、保護者や地域に学校の活動を発信することも効果的です。実際にそうした取組によって「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している学校もあります。

大切なのは「教職員全員で一年間の学習活動を俯瞰し、単元一つ一つの位置付けや、つながりを確認すること」です。単元配列表を作成することが目的になってしまうのでは十分な効果は得られません。単元構想や授業づくりに反映されてはじめてこのワークが効果を表します。そのことを踏まえて取り組むことが重要です。

ワークの流れ

Step 1 各教科の単元を記入する。

ワークの事前の準備として「学校教育目標」「育てたい力」「学年教育目標」などの各目標、「学校行事」「教科・領域等の単元や学習内容」などの学習活動を事前に記入しておきます。
教科・領域ごとの年間指導計画に基づいて、「育てたい力」との対応を色で分けて記入しておくと、ワークがスムーズに進みます。

Step 2 単元ごとのつながりを示す。

事前に作成しておいた単元配列表を学年担当などのグループで俯瞰し、内容につながりがある単元を——でつなぎます。
ここでも重要なのは「焦点化」することです。たくさんつなぐよりも、「育てたい力を育成するために、特にこのつながりを重視したい」という単元に限定してつなぎましょう。

Step 3 単元の配列を工夫する。

単元をつなぐを踏まえて、可能な範囲で単元を入れ替えます。例えば「国語で表現の工夫について学ぶ」→「総合的な学習でステージ発表する」のであれば、スムーズに既習事項が活用できるよう時期を近づけるなどの工夫ができます。
また、あまりに発表活動が同時期に集中している場合は分散させるのも効果的でしょう。

Step 4 評価・改善に活用する。

作成した単元配列表を常に掲示し、評価・改善に活用することも効果的です。
単元のワンポイント評価を付箋で貼り付けておくと、つながりのある単元の指導に役立ちます。
単元配列表を軸に児童生徒の学びを交流し、カリキュラムを見直すことが可能になります。

単元配列表作成例

〇〇中学校 第3学年 単元配列表

学校教育目標 自ら学び主体的に生きる、健康で思いやりのある心豊かな生徒の育成

育てたい力 主体的に学び、行動する意欲 強く、しなやかな心 自他を思いやる豊かな心 地域を愛し、ともに歩む態度

学年教育目標 自らの生き方について考え、自他の成長のために具体的に行動する生徒の育成

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校行事等	始業式・入学式 各種学力体力調査 春季大会	校外学習 生徒総会 中間テスト			コンクール 市選抜	始業式 体育大会	文化発表会 中間テスト 生徒会選挙	進路面談 期末テスト	三者面談			公立高校中期選抜 卒業式
道徳												
総合的な学習の時間												
特別活動												
国語												
数学												
社会												
理科												
音楽												
美術												
保健体育												
技術												
家庭												
英語												

※ワークシートデータは京都府総合教育センターホームページ（I T E C）に掲載しています。

○単元ラベル

「育てたい力」との対応を色で示します。単元名と時数をラベル内に記入します。

単元名（時数）	単元名（時数）	単元名（時数）
単元名（時数）	単元名（時数）	

○関連付けバー

「単元の学習内容」のつながりをバーで示します。関連する単元のラベル同士をつなぎます。

ラベルの色とバーで単元をつなぐを「見える化」します。



学びをつなげ、広げる単元構想 ～「育てたい力」に向けてつながる学び～①

「育てたい力」を軸にした
単元の構想に

ワークのねらい

設定した目標が活用されなければ「絵に描いた餅」になってしまいます。このワークはその目標を単元構想につなげることがねらいです。

それぞれの単元には固有の「ねらい」があります。確かに重点目標は重要ですが、そればかりを意識しては単元で育成すべき資質・能力がおざなりになってしまいます。そこで、このワークでは「単元で育成を目指す資質・能力」を設定することで、「単元のねらい」と「重点目標」をつなぎ、単元構想にカリキュラム・マネジメントを活用します。

また、具体的な「工夫・手立て」や「つながる学習」を検討することによって、「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」にある教科等横断的な学習活動の編成、学校内外の資源の活用を単元構想に盛り込み、「成果・活用の手立て」「課題・改善の手立て」で学びの連続性を高め、学習効果の最大化を図る評価・改善サイクルの確立を目指します。

ワークの流れ・注意点

Step 1 「単元で育成を目指す資質・能力」を検討する。

ワークシートの項目を個人で記入します。

特に重要なのが「単元で育成を目指す資質・能力」です。「単元のねらい」と「重点目標」がつながるよう意識しましょう。また、「重点目標」を焦点化することも大切です。

グループで検討することで共通理解を図ることができます。その単元に関わる教職員でグループを編成しましょう。

Step 2 「工夫・手立て」「つながる学習」を検討する。

次に具体的な実践を構想します。

「単元で育成を目指す資質・能力」を育成するためにどのような工夫・手立てが考えられるのか、また、その工夫・手立てを他教科・領域の授業や学級づくり、環境づくりにどうつなげればよいかを考えます。

「つながる学習」は授業だけではなく、図書室や教室の環境づくり、日常生活も視野に入れて検討しましょう。

Step 3 評価し、活用・改善の手立てを検討する。

実践を評価し、次の実践につなげます。

このとき、意識するのは「学びの連続性」です。この単元の学びを次にどうつなぐのかを意識し、不十分であればそれを補う手立てを、十分であれば次のステップを考えましょう。

このワークでは細かく触れていませんが、評価の方法や規準を事前に明確にしておくことより効果的な実践になります。

ワーク 3 学びをつなげ、広げる単元構想シート

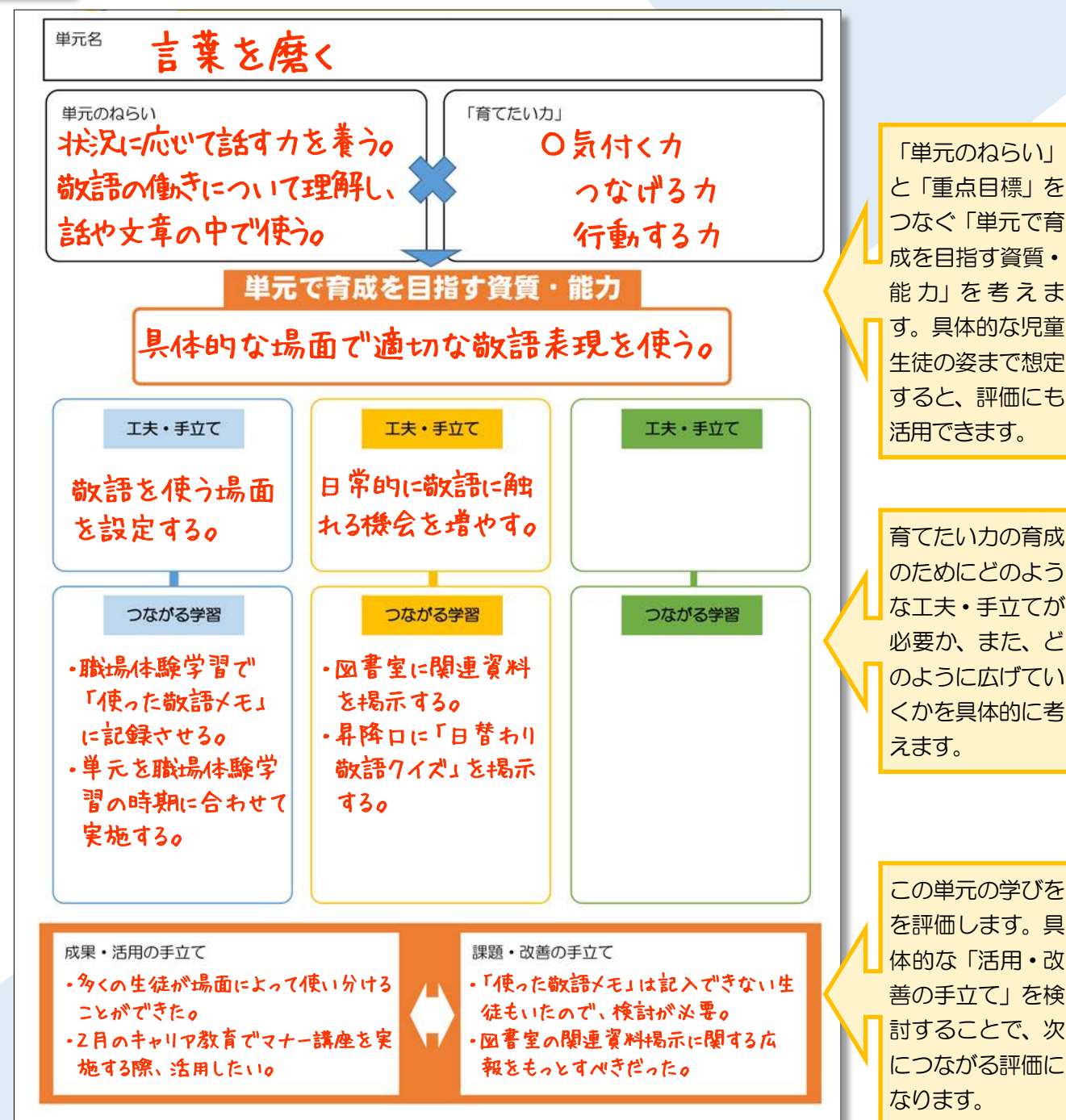
単元名		
単元のねらい	「育てたい力」	
 		
単元で育成を目指す資質・能力 		
工夫・手立て	工夫・手立て	工夫・手立て
つながる学習	つながる学習	つながる学習
成果・活用の手立て		課題・改善の手立て



※ワークシートデータは京都府総合教育センターホームページ（I T E C）に掲載しています。

学びをつなげ、広げる単元構想 ～「育てたい力」に向けてつながる学び～②

記入例



Point!

カリキュラム・マネジメントには様々な単位があります。学校経営計画やグランドデザインなど学校全体に関わるものから、学年・学級づくり、教科・領域の全体計画など様々なものがあり、それらが相互につながり、関わり合うことが重要です。このワークは「単元の学習内容が学校の教育課程全体にどのように位置付けられているか」を意識し、単元構想する方法を学ぶことがポイントです。

教えて！センタ君♪



よく「ベクトルをそろえる」と言うけれども、どのように取り組んだらいいの？



ベクトルをそろえる時に重要なポイントが2つあります。

1 目標の共通理解

まずはどの方向にベクトルをそろえるか、方向性を共通理解することです。ワーク1で行ったように、児童生徒の実態の把握・共有から目標を設定することで共通理解が深まります。ESD（持続可能な開発のための教育）などの国際的な概念や問題解決能力、論理的思考力といった資質・能力の育成など、育てたい力の「核」となるものを設定すると、方向性はより明確になります。学校や児童生徒の実態に合わせて「社会に開かれた教育課程」の視点から設定すると良いでしょう。

また、目標設定と評価をつなげるために、マトリクスなどを用いて、学年ごとの目指す姿を明示することも効果的です。

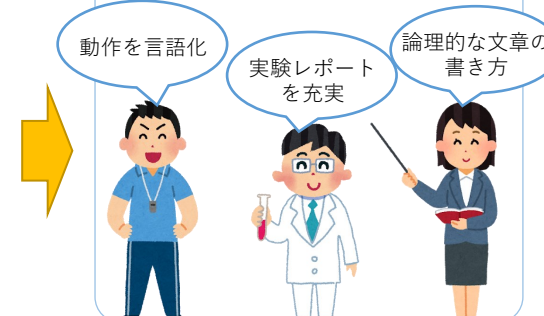
2 「特性に合わせた方法」の検討

大切なのは各教科・領域、学年・学級の「特性に合わせて方法を検討する」ことです。児童生徒の実態や教科・領域の特性を見極めて、目標に向かってそれぞれの方法でアプローチすることが効果的です。

児童生徒の現状把握から
育てたい「表現力」
を共通理解



教科の特性を
生かしてアプローチ



学びの効果を高める授業構想 ～6つの工夫で学びをマネジメント～①

個々の授業の工夫・手立て
の検討に

ワークのねらい

カリキュラム・マネジメントには、グランドデザインの作成や教育課程の編成といった「学校のカリキュラム・マネジメント」や日々の学校生活や学習活動の中で学級づくりをどのように進めていくのかという「学級のカリキュラム・マネジメント」など様々な単位があります。

その最も小さな単位が「授業づくり」です。ワーク3の単元構想をもとに「教育課程の中でどのように位置付けられるのか」、「前後の学習はどのようにつながっているのか」、「何をねらいとして、どのような工夫ができるのか」などを検討し、1時間の授業を構想します。

右に示したワークシートでは6つの工夫を項目として挙げています。「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」にある「教科等横断的な学び」、「人的・物的資源の活用」などを中心とした工夫で授業を構想するものですが、学校の研究主題に合わせて項目を変更しても良いでしょう。学校それぞれの実態に合わせて自由にアレンジして取り組むことが大切です。

ワークの流れ

Step1 「前時の学び」～「次時の活動」を検討する。

「単元で育成を目指す資質・能力」をもとにシート左側の「前時の学び」～「次時の活動」を検討します。

- ・前時の学び …単元の前時で学んだ内容を記入します。単元の1時間目の場合は既習事項で関連がある項目を記入します。
- ・本時のねらい…本時のねらいを記入します。単元の中の位置付けを意識して、ねらいを焦点化することが重要です。
- ・本時のゴール…本時のねらいに基づいて、目指す児童生徒の姿を明示します。授業の評価につながるよう、具体的な姿を検討しましょう。
- ・次時の活動 …単元の次時で学ぶ内容を記入します。単元の最後の時間であれば、この単元の学びがにつながる学習活動を記入し、学びの連続性を高めます。

Step2 「6つの工夫」を検討する。

「本時のねらい」を達成するために検討した「6つの工夫」をシート右側に記入します。全ての欄を埋める必要はありません。効果的な工夫だと考えられるものを記入しましょう。

- ・活用できる学習スキル…既習事項から、本時で活用できる学習スキルを整理します。
- ・つながる体験・学び …本時の学びにつながる、前後の体験や学びを整理します。
- ・活用できる機器・人材… I C T 機器や地域人材など、活用できる資源を整理します。
- ・学習形態の工夫 …ペア学習、グループ学習など学習形態の工夫を検討します。
- ・環境づくりの工夫 …教室や図書室、廊下の掲示物など環境づくりの工夫を検討します。
- ・その他 …上記の他に工夫できることを検討します。

ワーク4 学びの効果を高める授業構想シート

単元名

(時間目/全 時間)

単元で育成を目指す資質・能力

前時の学び

活用できる学習スキル

つながる体験・学び

本時のねらい

活用できる機器・人材

学習形態の工夫

本時のゴール

環境づくりの工夫

その他

次時の活動

《振り返り》

※ワークシートデータは京都府総合教育センターホームページ（I T E C）に掲載しています。



学びの効果を高める授業構想 ～6つの工夫で学びをマネジメント～②

記入例

単元名 言葉を磨く (2 時間目 / 全 4 時間)	
単元で育成を目指す資質・能力	
具体的な場面で適切な敬語表現を使う。	
前時の学び ・尊敬語、謙譲語、丁寧語の特徴と使い分けを理解する。	活用できる学習スキル ・ブレインストーミング
本時のねらい ・場面を想定し、ロールプレイを通して実践力を高める。	つながる体験・学び ・英語でのペア学習 ・スピーチ大会の評価コメント ・職場体験学習
本時のゴール ・場面に合わせて適切に敬語を用いることができる。	活用できる機器・人材 ・進路主任の参観、コメント
次時の活動 ・職場体験学習で実際に敬語を使ってみる。	学習形態の工夫 ・3人グループ
環境づくりの工夫 ・敬語の掲示物 ・敬語に関する図書を学級図書に配架	その他
《振り返り》 具体的な場面を想定してロールプレイできた。図書の配架も◎。	

「本時のねらい」が達成できたと考えられる具体的な姿を記入します。

「本時のねらい」を達成するために取り組む工夫をメモします。

気付いた点を簡潔に記入し、次の学びにつなげます。

Point!

授業者にとって「カリキュラム・マネジメント」は「教科等横断的な学習活動」というイメージが強いのではないのでしょうか。しかし「学習効果の最大化を図る」という視点で考えた場合、そうした横のつながりだけでなく、既習事項や今後の学びを意識した「学びの連続性」を高める縦のつながりも重要になります。学習形態や環境づくりなど様々な工夫を加えることも大切な視点です。

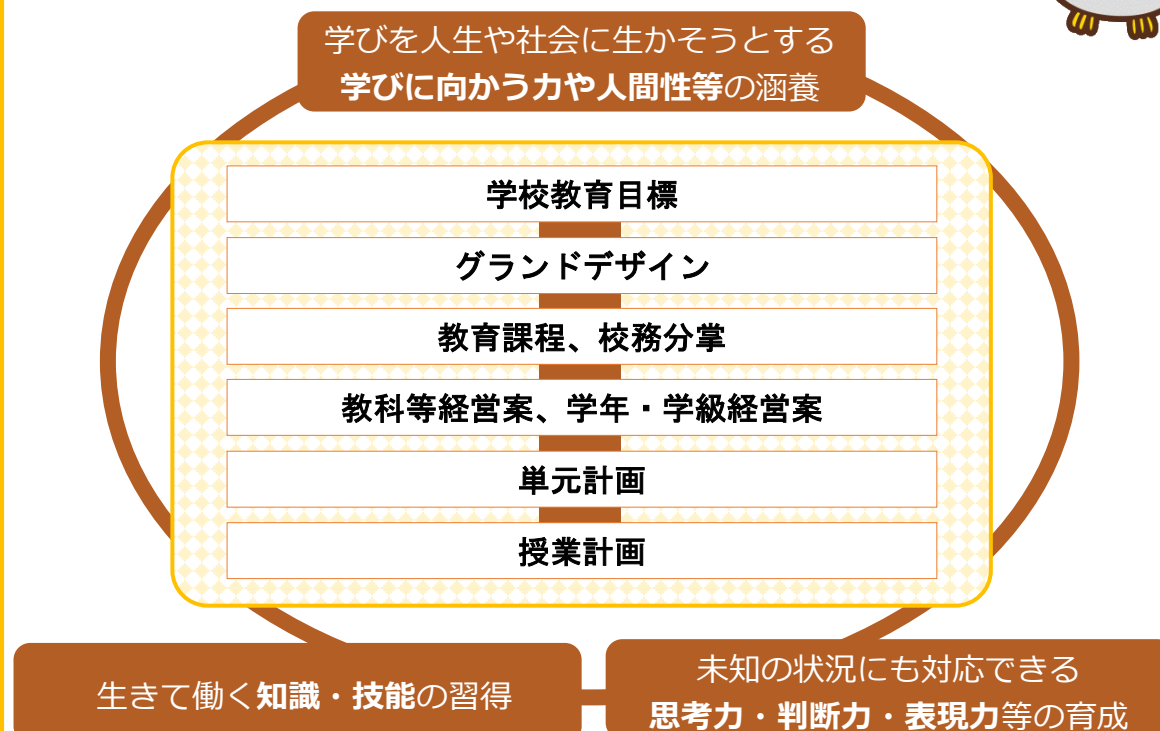
教えて！センタ君♪



全教職員で「カリキュラム・マネジメント」に取り組むってどういうこと？



カリキュラム・マネジメントは下の図のように、それぞれの立場で取り組み方が異なります。



管理職として、担任として、授業者として、分掌の担当者としてなど、様々な立場で関わるのですが、「学校教育目標の実現」、「児童生徒の資質・能力の育成」が共通の軸であることを常に意識する必要があります。

また、図書室や保健室の整備、掲示物などの環境づくりなど、学習活動以外でも児童生徒の学びを支えることができます。教職員一人一人の専門性を最大限に活用する「チーム学校」の視点から取り組みましょう。

取組の ススめ1 成長を見える化する「学級づくりすごろく」 ～取組をつないで学びの効果を高める～

集団または個人の学びの
連続性を高めるために

取組のねらい

「学校行事や特別活動などで学級集団の成長が見られたのに、次につながらず、取組がイベント化してしまう」という声をよく聞きます。また、多くの教室に掲示されている「学級目標」が教室の背景になってしまい、効果的に機能していない場合もあるのではないのでしょうか。

それらの学級づくりの課題を改善するために「学級集団の成長を見える化する」、「学びの連続性を高める」、「児童生徒自身が取組の学びを評価する」ことが、この取組のねらいです。

「学級づくりすごろく」を作成するのは児童生徒自身です。1年間の取組を見通してそれぞれの取組や学期ごとの目標や評価を児童生徒が考え、「学級づくりすごろく」そのものを常に更新し続けることで、学級の1年間の歩みと成長を見える化することができます。完全な白紙から「学級づくりすごろく」を作っていく、ある程度担任の先生がベースを作っておくなど、児童生徒の実態に合わせて取り組みましょう。

取組の流れ

- 1 「現在の姿」「1年後の姿」（学級目標）を記入する。
- 2 各学期の核になる取組や出来事をピックアップする。
- 3 取組の目標を考えてマスを作り、「学級づくりすごろく」に加える。
- 4 必要に応じてマスを追加するなどして、グレードアップさせる。
- 5 取組や学期ごとの評価を「学級づくりすごろく」に書き込んでいく。

学級のリーダー会で項目を考えたり、飾り付けなどを行うと「自分たちの『学級づくりすごろく』」という意識が高まり、より効果的です。学級の実態に合わせて取り組んでみましょう。また、それぞれの取組についてのコメントや写真を張り付けたりなどすると、「学級づくりすごろく」を軸に学級を活性化することができます。

作成例

目指せ1年後の自分たち！1年1組学級づくりすごろく



取組のススメ2 学びを創造する「9×9シート」～児童生徒が主体的に学びをマネジメント～

集団または個人の学びの
マネジメント力向上に

取組のねらい

変化の激しい社会を生きる児童生徒が「なりたい自分」を思い描き、生涯にわたって学び続けるための資質・能力を育むことは学校教育の大きな目標の一つだと言えます。この取組は「学びの主体者」として主体的に自己の学びをマネジメントする力の育成をねらいとしています。

児童生徒自身が大きな目標である「なりたい自分、目指す姿」を想起し、その目標を達成するための8つの目標を設定します。そして、その8つの目標に対して、さらに具体的な8つの目標を設定することで、目標達成への道筋を考え、自分自身で学びを創造する力を養います。担任の先生と面談をしながら、目標について具体化する方法を考えるのも良いでしょう。

この取組は児童生徒の学びだけでなく、学級づくりにも活用できる非常に汎用性の高い取組です。児童生徒の実態に合わせて、「9×9」を「5×5」などに変更して活用すると良いでしょう。

取組の流れ

1 目標を設定する

大きな目標である「なりたい自分、目指す姿」を考え、それにつながる8つの中目標、中目標に対する8つの小目標を設定します。最初からすべてを設定する必要はありません。日々の生活や学びを通して新たな目標が生まれ、更新することが重要です。

大切なのは「更新」することです。児童生徒がいつでも書き込みができるよう、自主学習用のノートに貼り付けたりすると効果的です。

2 日々更新する

日々の生活や学びを通して目標が達成できたらチェックをします。また、新たに目標が生まれたら書き足します。こうして「9×9シート」を更新しながら、「なりたい自分、目指す姿」に向けて何が必要なのかを考えて行動する「学びのマネジメント力」を育みます。



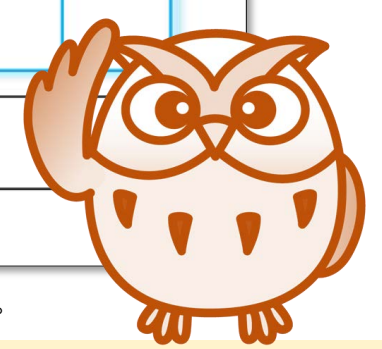
作成例

目標「なりたい自分、目指す姿」
学校の先生になる

目標実現のための「9×9シート」

先生から話を聞く	本を読む	先生をじっくり見る	毎日1時間勉強する	本を読む	小テストで100点を取る	毎日5人以上と話す	人の話をしっかりと聞く	言葉遣いを丁寧にする
新聞を読む	①先生のことを知る	ニュースを見る	字をきれいに書く	②勉強をがんばる	漢字を覚える	ゆっくりしゃべる	③上手に話す	お笑いをみる
			英検5級	そろばん4級	作文をがんばる	あいさつをする		
水泳50m泳げるようになる	毎日30分走る	夜9時には寝る	④先生のことを知る	②勉強をがんばる	③上手に話す	弟と毎日遊ぶ	保育士のおばさんに聞く	運動会でリーダーをする
朝6時に起きる	④体を鍛える	朝ごはんを毎日食べる	④体を鍛える	学校の先生になる	⑤子供の世話をする		⑤子供の世話をする	
運動会で1番を取る			⑥いいことをする	⑦	⑧			
掃除をがんばる	あいさつをする	手伝いをする						
食器洗いをする	⑥いいことをする			⑦			⑧	

【振り返り】



※ワークシートデータは京都府総合教育センターホームページ（ITEC）に掲載しています。



奈良教育大学
教授

赤沢 早人

子どもたちと「直面する」 カリキュラム・マネジメントを

新学習指導要領で示されたカリキュラム・マネジメントは、その語感から、グランドデザイン の作成、時間数の確保などといった、いわゆる学校経営面に注目が集まりがちです。もちろん、その理解は誤りではないのですが、そうした見方から、もし学校の主人公である「子どもたち」の姿が見落とされているのであれば、本末転倒というべきではないでしょうか。

カリキュラム・マネジメントの目的は、「PDCAを適切に回すこと」ではなく、「子どもたちの可能性を最大限に伸ばすこと」です。本ハンドブックは、学習指導要領の示すところに沿いながらも、何よりも「子どもたちを伸ばすこと」にフォーカスして編まれています。校内研修等の機会を用いて、掲載されたワークに校内の先生たちが協働して取り組まれば、きっと、目の前の子どもたちをどの方向に伸ばしていけばいいのか、そしてそのためには自分たちが何をすればいいのかが見えてくることと思います。

カリキュラム・マネジメントの実施と言っても何をすればいいのかお悩みの先生方。ぜひ、このハンドブックを活用して、子どもたちと「直面する」カリキュラム・マネジメントに取り組んでいただくと期待いたします。



国立教育政策研究所
総括研究官

西野 真由美

学校文化を創造するカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントは、新学習指導要領の理念を実現するための重要な柱である。しかし、用語への馴染みのなさもあって、学校全体で取り組む活動として意識しにくいという課題が指摘されてきた。

京都府総合教育センターで開発いただいた一連のワークシートは、「教科等横断的な視点」、「PDCAサイクル」、「人的・物的資源の活用」というカリキュラム・マネジメントの三側面を自然に、そして具体的に意識できるよう構成されている。これらを各学校の校内研修で活用すれば、カリキュラム・マネジメントに対する教職員の共通理解が図られるだけでなく、先生方の日々の授業構想や学習指導の改善にも生かせると期待できる。カリキュラム・マネジメントが「学びをつなぐ」取組であることが実感できるだろう。

各学校では、これらのワークシートを活用して、本校で育てたい力や学びの工夫についての校内での対話を豊かに広げ、学校文化の創造につなげていただきたい。



文部科学省初等中等教育局
教科調査官 生徒指導調査官
国立教育政策研究所
総括研究官 教育課程調査官

長田 徹

「学びをつなぐ」本ハンドブックの意義

PISAやTIMSSなどの国際的な学力調査の結果からも「学びが繋がらない」我が国の児童生徒の声が確認できます。教科間、学年校種間、学校行事と日常生活、授業と生活や将来、本来であればつながっているはずなのに児童生徒の目にはバラバラに見えています。もちろん、教科や学年などの学びのまとまりを否定するものではありません。ただ、学びはつながっていることを児童生徒に実感してもらえないだろうか。そんな視点で“今ある宝” 普段の取組を見つめることが本ハンドブックの特長です。

学校教育目標を確認して、目の前の児童生徒の「強み」と「弱み」を把握する。身に付けさせたい力をイメージし、その力に向かって教科でできること、学校行事や生徒指導等でできることを洗い出してみる。これほど、学校現場に寄り添ったカリキュラム・マネジメントのハンドブックは他に見当たりません。

豊かな学びが繋がっていることを児童生徒に実感させたいという思いがあふれた本ハンドブックの活用により、児童生徒のための本質的なカリキュラム・マネジメントが進むことを心から期待しています。

結びに、編集に当たられた京都府総合教育センターの皆様には厚く御礼を申し上げます。



「カリキュラム・マネジメントって何をすればよいの？」

「なぜカリキュラム・マネジメントが必要なの？」

「カリキュラム・マネジメントは管理職の仕事じゃないの？」

平成29年に出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」を開設した時に受講者から寄せられた声です。本ハンドブックはそうした現場の先生方の声に応えるため、よりわかりやすく、教職員一人一人の実践につながるものを意識して作成しました。

掲載した様々なワークシートは「未完成」のものです。各学校でそれぞれの実態に合わせてアレンジしてはじめて完成するものと考えています。そのため、京都府総合教育センターホームページ（ITEC）には書き換え可能な形式でワークシートデータを掲載しています。自由にアレンジして、校内研修や毎日の授業づくりや学級づくり、環境づくりに活用していただけますとうれしく思います。

最後になりましたが、研究に御協力いただきました皆様、専門的立場から御指導をいただきました関係各位及び指導助言をいただいた奈良教育大学 赤沢早人教授に厚く御礼申し上げます。

豊かな学びをつなぐ カリキュラム・マネジメントハンドブック

発行 令和2年3月
京都府総合教育センター
〒612-0064 京都市伏見区桃山毛利長門西町
TEL 075-612-3266
FAX 075-612-3267
E-mail ed-center@kyoto-be.ne.jp
URL <http://www.kyoto-be.ne.jp/ed-center/>



平成30・31年度 全国教育研究所連盟課題研究
「カリキュラム・マネジメントを活用した学校づくりの支援」

研究代表者 京都府総合教育センター 企画研究部
研究主事兼指導主事 森山隆仁

